日本医史学会の沿革

酒 井 シ ヅ*

日本医史学会が学会として発足したのは昭和2年11月のことであった。この時の発起人は富士川游・藤浪剛一、藤井秀旭、竹内薫兵、小田平義である。初代の理事長に東大精神科の教授呉秀三を迎え、医史に関する事項を研究し、医史に関する知識を普及することを目的に発足した。しかし、この時、学会の機関紙に明治13年創刊の中外医事新報をあてることに決めて、その1130号から日本医史学会機関誌と銘打って発刊した。これが昭和2年12月であった。昭和16年1月の1287号から日本医史学雑誌と改題され、途中、休刊の時期もあったが、現在に続いている。

中外医事新報はその名が示すように、明治、大正を通じて、国内、国外の医事関係の記事を速かに報ずることを目的として、国外については外国、特にドイツの最新医学雑誌にでている一般医家の興味をそそる記事を抄録して載せていた。こういった啓蒙雑誌も大正に入ると各科の専門誌や医事ニュースを主体にとり扱う雑誌の出現で最盛期のような価値を得られなくなってきた。そこで、昭和元年の末から医史学の専門誌に変っている。そういった状態の中で、日本医史学会の創設が浮び上がり、この雑誌がその機関誌に変転していったものと思われる。しかも、当時、中外医事新報の経営は初代原田貞吉の跡を日本医史学会創立発起人のメンバーの富士川游、藤井秀旭、竹内薫兵、小田平義の4氏に任かされていたことも問題なく中外医事新報を医史学専門誌に変えていった要因であったであろう。

今年の秋、長崎で第74回日本医史学会総会が開かれる。昭和2年に発足した学会が年1回の開催である総会を既に74回も回を重ねたことを奇異に思うであろう。

これには富士川游と奨進医会の主催した先哲医家追薦会の説明をしなければならない。

富士川游は「日本医学史」「日本疾病史」など数多くの著作を残し、日本の医学史の基盤を作り上げた人であることはよく知られている。彼は明治20年の夏、広島医学校を卒業して、秋には上京したが、程なく、中外医事新報社に入り、その編集主任として活躍を始めた。明治22年から、その傍ら「私立奨進医会雑誌」の発行を始めている。この奨進医会とは、そもそもの始まりが、富士川游の父^{スズ}雪によるもので、広島県沼田郡長楽寺町（現在の安佐郡安古市町）で医を業としながら、近隣の同業の友を集め、医学知識の向上をはかるべく医学雑誌の回覧、医事ニュースの交換などを行う場を作り、それを奨進医会となづけたことにあった¹⁾。この会を游が引き継ぎ、上京を機会に、単に一地方の会でなく、全国的なものに発展させたのであった。明治22年には会員280名余りで、会の趣旨に「1. 実際医学の研究及其上進を図る 2. 医の徳義を維持せんこと 3. 医の風紀を高尚にすること 4. 医の権利を拡張すること」の4項目をあげている²⁾。

明治23年、この年に国会が初めて開会し、それを記念して内国勸業博覧会が開かれたが、その機会に乙酉会の発案で第1回日本医学会が開催された。この時、開会式にひき続いて、長与専斎の提唱で先哲を祭る儀式が行われている³⁾。この先哲には解体新書を訳した前野良沢、杉田玄白、桂川甫周、蘭学を発展させた大槻玄沢・宇田川玄植、玄真の6人を挙げている。この時の大会で富士川は記録幹事として活躍したが、ここで大いに歴史に対する興味をそそられたのであろう。その頃から医史学の本格的な研究にとり組んでいる。しかし、もともとそれ

* Shizu SAKAI, 順天堂大学医学部医史学研究室

に対する関心は強く、明治 21 年の中外医事新報 187 号から中外医伝の項を設け、外国、国内の名医の略伝を載せている。だが明治 25 年 1 月の第 283 号から明治 31 年 1 月の第 427 号までの間、ほとんど毎号に医人伝を掲載し、またこの頃「日本医籍考」をはじめ、いくつかの医史学関係の著書を出版している。この時までの医史学の分野は未開拓に近く、富士川の近くにいた人の話では、文明開化の嵐の中で人に笑われながら古書を求め、先人の跡を探して歩いたという。こうした彼の活動を時には共にし、また側面から援助したのが同郷の人、呉秀三であり、その友人で、後年、皮膚科学の大家となった土肥慶蔵であった。

明治 25 年、おそらくこの 3 人の積極的な働きかけがあったのであろう。この年の 3 月 4 日に先哲祭が開かれた。つまり、明和 8 年 (1771) 3 月 4 日に前野良沢、杉田玄白らが小塚原で腑分けを見学した時、ターヘル・アナトミアの図の通りに内臓があり、骨の数も合うことに驚き、この本の翻訳を是非果さねばならぬと決意したのだった。それでこの日を記念して先哲祭を催した。その時を第 1 回に数え、それからのち毎年 3 月 4 日に医家先哲追薦会が行われた。その会を主催する形をとった会が奨進医会であり、これは先に述べたように富士川游の私立奨進医会の組織を改めたものである。明治 27 年には当時の東大の解剖学の教授田口和美を会長に迎え、協議員に呉秀三、高比良養次郎、岡崎桂一郎など 13 名、常務委員に富士川游、藤根常吉、福井信敏を置き、特別会員として当時の医学界の長老、実力者のほとんどが名を連ねている。

奨進医会は機関誌として「医談」を明治 26 年 5 月から発行した。この雑誌は明治 41 年に第 115 号をもって廃刊となり、「刀圭新報」に替ったが、その変遷が奨進医会の一面を物語っている。つまり、この会は創立当初から医師の倫理を確立し、風紀を高尚にすることを目的に掲げていた。その結果、医家先哲追薦会を主催し、そこで西洋医学が日本に入ってから、幾多の波に洗われながら、遂に今日このように発展した姿を見るに至るまでの多くの先人たちの偉業を回想し、讃え、感謝した。

明治 27 年に田口が会長となってから、毎年、医家先哲追薦会の日にその年に因縁のあるテーマを選び記念祭や展覧会を催した。例えば、明治 29 年 (1896) にはジェンナー種痘発明百年記念とシーボルト生誕百年記念を行い、翌 30 年に麻醉法発明 50 年祝典を催した。また、それ以外の年にはその年、その年に産科、あるいは眼科と

特定の科をテーマにとり、その科で功績のあった人々をとり上げて、講演会と展覧会を開いている。ところが、明治 37 年、田口の急逝にあい、それ以後は方針を幾分かえて明治 42 年の第 18 回医家先哲追薦会には多紀桂山 100 年忌と奥村良筑 150 年忌、アウエンブルゲル 100 年忌とを併せ行っている。多紀桂山は幕府医学館の主宰者であり、漢方一派、考證派の泰斗として、漢方の歴史では欠くことのできない人であり、奥村良筑も福井の名医で、吐方の大家として広く名の知れた人である。いずれも漢方の名医である。この年までの医家先哲追薦会で名を挙げられた人々はいずれも西洋医学の受容、発展に貢献のあった人に限られていた。それを、ここにそれにこだわらず、広く医学史上に名を残した人を撰ぶことに変わってきた。これには、その頃になるとかつて激しかった漢洋医学闘争も一段落して、漢方側の力が極端に弱まってしまっていたこと、また、一度否定した漢方に西洋医学になり利点のあることを一部の人々が認識しはじめていたことも影響している。こうして、毎年、3 ないし 4 題の講演が先哲祭にひきつづいて行われ、同時にそれに関係した資料の展示があった。ここに云う先哲祭というのは神官の祭文朗読と参会者一同の奉拝であって、これはのちになると、これだけを回向院、つまり小塚原処刑場にあった寺で代表者が出席して行われ、講演会は別の場所で行われた。

明治 42 年、医談が刀圭新報に改められたが、それは医談がとかく医史学関係の記事で埋まってしまう傾向があり、奨進医会が本来主張してきた医権の拡張、医学知識の向上をはかるには片よりすぎていたことが大きな原因であった。それで、読者も限定してきたために、読者層を拡げ、奨進医会の主旨を一般医家に広く広めようということで改題し、その巻頭に明治 26 年に作られた奨進医会の綱領を載せている。その主旨はすでに述べた私立奨進医会のものと同じである。つまり、医風を正し、医学の向上を図り、医者の権利を拡充することであった。それで、この雑誌の第 1 号には呉秀三の「精神健康者の病側観」と題する巻頭論文で始まり、尼子四郎の「催眠薬」の処方記述、大槻如電の「桂川月池先生」という伝記、松本端の「大阪市種痘歴史」などの他数編の医史学関係の文と医事ニュースを載せ、この中にはドイツの A・ラーベの「医家経済学」の内容の一部が紹介されている。このように綱領に則った、多岐にわたる内容で始まった。そして、この年の秋、医箴十五則を定め、各会員に配布し、その解説を雑誌に載せて医家の倫

理の規範を示している。翌年には田口和美の急逝以来空席であった会長の席に東大の法医学の教授片山国嘉を迎えた。大正2年には奨進医会のなかに医学法律研究会を作り、医事法制への関心を強めていった。翌年からその流れを汲むものが奨進医会から離れて日本医師協会を発足させ、そこで医師の職務、社会的および経済的位置の改善を図ることを目的に、医師の共済、調査、紹介、および弔慰などを行っている。刀圭新報の第10巻第6号(大正8年)からあとを日本医師協会の機関誌にした。日本医師協会は一時、小川劍三郎の主宰のもとに、のちに労働科学研究所の所長となった陣峻義等が事務を担当し、彼が刀圭新報の編集にたずさわった。大正11年、この雑誌は再び医談と名を変え、のちに日本医史学会の理事長になった、医事法制の大家山崎佐が編集責任者となって、編集方針が医事法制に関するものに傾いていった。それで、従来から続いてきた医史学関係の記事は中外医事新報に載るようになり、先にのべたように昭和元年11月から医史学専門誌と変わった。この時流のなかで、冒頭に述べたように昭和2年11月に日本医史学会創立協議会が生まれ、翌月に日本医史学会が誕生、第1回月例会が催された。そして会則に、年1回の総会と毎月1回の月例会を開くこととあった。翌年の総会は第37回医家先哲追薦会の時に開かれ、それは奨進医会と日本医史学会共催という形がとられた。それ以後、この先哲追薦会は実質的に日本医史学会の主催するところとなり、それを総会としたために、戦後になって先哲追薦会の回数を継承して、今年(2019年)の日本医史学会総会を第74回と数えるにいたった。

日本医史学会は日本医学会のなかでもユニークな存在であるが、その第1分科会として活躍している。日本医学会に医史学会が正式に加入を認められたのは昭和9年の第9回日本医学会総会の時であった。しかし、既に述べた明治23年の日本医学会の時に先哲祭が行われ、それをきっかけに医家先哲追薦会が始まったのであり、また明治35年に第1回連合医学会(現在の日本医学会総会のはじまり)の時にも医史展覧会を行なうのに、富士川をはじめ奨進医会のメンバーが企画から展示に至るまで担当した。また、明治43年、第3回日本医学会総会が京都で開かれた時、この年の医家先哲追薦会を京都大学の尊攘堂で催している。このように日本医学会は発足当初から、ただ医学の進歩を追い、競い合うだけでなく、医の倫理を語り、先人の業績を讃えることも併せて行ってきた。そして、その役割をはじめ奨進医会が担当し、

のちに日本医史学会へと移っていった。また昭和9年、日本医史学会が第1分科会となった機会にはじめて一般会員から演題募集を行ない、それ以後、医学会総会の開催年には必ず現在のような一般会員の講演が行われた。

昭和15年11月、日本医史学会の長老富士川游が75才の生涯を閉じた。その残された膨大な著作が物語るように、生涯ひたすらに歴史の探求を続け、全国各地の資料を集め、それらを客観的に価値づけ、日本の医学史の体系化を図り、ルールを引いたのであった。勿論、彼の業績は医学にとどまらず、多方面にわたり、特に医学雑誌の出版界に果した功績は大きい。また、宗教界でも独自の活躍を展開した²⁾。

富士川の歿後、戦局の拡大による物資の不足もあって中外医事新報はB-5版からA-5版に縮小して、雑誌の名前も「日本医史学雑誌」と改めた。しかし、号数は明治13年からのものを継ぎ、現在の日本医史学雑誌の通巻号数に続いている。

昭和16年、富士川の跡をついで慶応大学の放射線科の教授藤浪剛一が理事長になったが、わずか1年余の後に亡くなり、その後を山崎佐が継いだ。この頃、すでに戦局が激化し、国威高揚の面からも日本の医学史が省みられ、医学史の研究が盛んに行われるようになってきた。また、昭和15年、紀元2600年を記念して明治前科学史の編纂が日本学士院で企画され、医学の分野では現在も活躍している緒方富雄、小川鼎三、大鳥蘭三郎、中泉行正、田中助一、石原明の諸先生や既に亡くなった藤井尚久、山崎佐らが執筆を担当した。

医史学会でも山崎佐理事長を中心に活潑な活動がくり広げられていた。しかも、山崎は学会を強化するために理事、評議員に現職の大学教授を据え、新しい企画を立て、次々と活動を展開するつもりでいたのであろう。しかし、不幸にして、戦局はいよいよ激化してきて、ついに戦火をあびるまでになってしまった。時は昭和20年の1月、折角まとめ上げた1月号の原稿が印刷屋とともに焼失してしまった。無念にもここで日本医史学雑誌の長い休刊の時代に入ってしまった。

戦後、空腹と物資の不足、倫理感の一転は医史学の研究まで影響を及ぼし、その復興までなかなかたどりつけなかった。とはいっても昭和22年、大阪で開かれた第12回日本医学会総会で第1分科会の面目を果している。この時、大鳥理事を監事にわずか10題であったが、演題が集まり、報告された。その内容は終戦直後の急に民主化が起り、激変した時代であったにもかかわらず、

泰然自若としたものであった。癲癇の歴史を論じ、ポンペの業績を讃え、織田信長の体質について述べるといった工合で、これがあの食糧難の時代かと驚かされる。こ

ういったことが日本医史学会の特徴にもなっている。

翌 23 年に、戦後第 1 回目で、通算第 57 回医家先哲追薦会が東京で開催された。だが、世相はますます激しい勢いで変化する中で、医家先哲追薦会の存続が難かしくなったのであろうか、あるいはこの会を続けてきた人々の心に動揺が起ったのであろうか、ともかく、第 57 回を最後に途絶えてしまった。それから昭和 29 年に日本医史学会総会と銘打って再開されるまで 4 年毎の医学会総会開催の年を除いて、何等活動をした様子はみられない。それだけに医学会総会での第 1 分科会としての記録をみると、毎回かなりの演題が出されており、各会員がこつこつとその研究を続けていたことがうかがえる。

昭和 29 年、日大の生理学の教授内山孝一理事長のもとに、日本医史学会総会が開かれ、その回数を医家先哲追薦会のものを継承することにした。そして、待望の日本医史学雑誌の復刊もなり、この年は新生医史学会にとって記念すべき年となった。そして雑誌の復刊の機会に、従来、中外医事新報の創刊時からの通巻号数だけであったのに、日本医史学雑誌と改題した時を第 1 巻と数えた巻数をつけ加えて、復刊第 1 号を第 5 巻第 1 号とした。また、それまで月刊誌であったものを季刊に変更した。その後、年 1 回の総会は順調に行われたが、雑誌の発行は人手不足や諸条件が重なって不規則になった時代もあり、今年はようやく 4 冊の発行をすることができたと喜びを語った編集後記もある。

こうした学会にとって苦難の時代であった昭和 35 年、日本科学史学会の年会の機会に大阪で緒方洪庵生誕 150 年記念医学史研究集会が日本医史学会共催で開かれた。その時にかなりの人が集まったが、その人たちは医者だけでなく、パラメディカル分野の人から、哲学者まで幅広い分野の人々であった。そこで、洪庵の適塾に学んだ人々の日本の近代化に果たした役割、さらに適塾の意義を論じ、改めて、この塾の文化史上での位置、役割が問い直された。そしてこの時に集った人たちのなかから、これを機会に医学、医療の歴史を将来のものに結びつけて考え、歴史を学んでそれらの将来の総合的指針になるものを把みとうとするグループが生れてきた。またこの人達の中にはこれまでの日本医史学会での発表が、過去の医療を考証し、文献の探索や故事来歴の詮索にとどまる傾向にあるのにあきたらなく思っていた人々もあっ

て彼等が主となって翌 36 年に大阪で医学史研究会を創設した。同時に医学史研究を機関誌として創刊し、その後、現代史をとり扱う性格を強く示しながら順調な発展を示している。そのため、同研究会の会員であって日本医史学会の会員である人も少なくなく、日本の医学史研究の分野の重要な一翼を担っている。

現在の日本医史学会は会員数約 450 名という小規模のものながら、歴史の専門家からずぶの素人まで幅広い分野の人からなり、発表される論文も古代から現代まで洋の東西に関係なく、バラエティに富んでいる。このように医史に関わりのあるものすべてに発表の場を設けることがこの学会の一つの目的であり、それらの発表の積み重ねがあつてこそ、現代の医学の本質をより正確に理解することが可能となって、自ら将来の方向も予測できるであろう。また、医療、医学の歴史は日本の文化史を明確にする上でも欠くべからざるものである。つまり、日本の医療は仏教の伝来以来、たえず外国からの影響を受けてきた。医療が生命にかかわることだけに、いつの時代でも、いちはやく取り込まれ、消化されている。それだけに外来文化の浸透の度合の指針ともなりうる。また、消化されていく過程をみると、どの時代でも、どんな外来文化であっても素早く日本化されていく姿を見る。このような特性が現代どのような形で表現されているのだろうか、あるいは、過去に経験した誤ちが繰返えされていないかということも併せて見ていかなければならない。ところが、現状ではまだそこまでの段階に至らず、過去の実態を正確に把握し、その流れを正確に握みとうとしている。というのも、富士川により、史実集積とその価値がつけられ、医史の大よその流れをつかむまで体系化されたが、それを更に深めるにはまだ医史学を専門に学ぶものの数はわずかであつて、その弱体がなげかれている現状である。

文 献

- 1) 佐藤美実「奨進医会」広島医学 Vol. 21, No. 11, 96~107, 1968
- 2) 富士川游先生刊行会「富士川游先生」昭和 29 年
- 3) 「第 1 回日本医学史誌」明治 23 年

(昭和 48 年 7 月 11 日受付)